SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

〈谷崎源氏〉と玉上琢彌の敬語論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, ともえ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024904

〈谷崎源氏〉と玉上琢彌の敬語論

中　村　ともえ

はじめに

昭和二十四年、『潤一郎訳源氏物語』（全二十六巻、昭14・１～昭16・７、中央公論社）の改訳の企画が持ち上がった。後述する経緯を経て成立したのが『潤一郎新訳源氏物語』（全十二巻、昭26・５～昭29・12、中央公論社）、いわゆる「新訳」である。

「新訳」初刊巻一には、「源氏物語旧訳序」「源氏物語新訳序」の表題を与えられた二つの序文が並べられ[*1]、「新訳」を「旧訳」における「削除や歪曲」を補い正した「完全なもの」と価値付けた。京都大学国文学研究室に在籍し、谷崎の王朝小説『少将滋幹の母』（「毎日新聞」昭24・11・16～昭25・２・９）の資料調査の助手をつとめていた榎克朗は、二十四年五月頃、以前の訳で「故意に省略された個所があったのを、補正して完全なものにしたいと思い立たれたわけで、私にはその下準備（省略箇所や誤訳の指摘等）が命ぜられた」[*2]と証言する。同年六月、谷崎は榎をともない「旧訳」の校閲者であった山田孝雄を訪ね、再び校閲の任に就くことを依頼した。こうして「新訳」刊行に先立ち、「旧訳」で「最も多く纏めて削除」したという「賢木」の巻の一節が、「補遺」と銘打たれてまず発表された（「藤壺――「賢木」の巻補遺――」（「中央公論文芸特集」昭24・10））。

このように「旧訳」の補正を目的とし、「旧訳」の「補遺」の発表をもって始動した改訳の企画であったが、実際に刊行された「新訳」はそれに収まるものではなかった。「新訳序」の言葉を借りれば、「最初は…旧訳の文章を骨子とし、

---

*1 「源氏物語旧訳序」は『潤一郎訳源氏物語』巻一の「序」（初出は「中央公論」昭14・１、原題「源氏物語序」）の抄録。「源氏物語新訳序」は「源氏物語の新訳について」（「中央公論」昭26・４）を転載したもの。以下それぞれ「旧訳序」「新訳序」と呼ぶ。

*2 榎克朗「谷崎潤一郎氏と「少将滋幹の母」のことなど（追悼小記）」（「国語と教育」昭41・１）。

それを訂正する方針で行くことにしてゐた」が、「最近に至り、急に私は前の方針を一擲して…旧訳の文体を踏襲することを断念し、新しい文体に書き改める決意をした」という。急な方針転換の背景には以下のような経緯があった。下準備を進めていた榎が病のために外れると、後任として同じく京都大学国文学研究室の宮地裕、さらに玉上琢彌が加わった。玉上を「強力に推した」のは宮地で、谷崎は「だいぶん逡巡されたらしい」[*3]。玉上が谷崎と顔を合わせるのは「新訳」の刊行開始直前の昭和二十六年一月のことだが、この「玉上さんの出馬によって、単なる旧版の補修から抜本的改訳へと方針が一変したようであった」[*4]と榎は回想する。

本稿では、谷崎の一群の『源氏物語』の現代語訳、いわゆる〈谷崎源氏〉において、玉上の参加がどのような意味を持ったかを考察する。「旧訳」、「新訳」、さらに「新々訳」(『谷崎潤一郎新々訳源氏物語』全十一巻、昭39・11～昭40・10、中央公論社）の三種類の訳があることをもって、谷崎は『源氏物語』を三度、現代語訳したとされる。しかし、たとえば「旧訳」の改訳は、「旧訳」の刊本に谷崎や山田・玉上らが書き入れをするという手順で行われ、「『新訳』は、基本的に書き下ろしの草稿を持たない」[*5]。事態を簡略化すれば、「新訳」以降の訳文は、すべて「旧訳」のヴァリアントだと言ってもいい。本稿は〈谷崎源氏〉を「旧訳」を原型とする訳文の変形の過程と捉え、その中で玉上の参加が持った意味を明らかにするものである。

1．玉上琢彌と「新訳」の改訂

榎は改訂の方針転換の経緯を次のように説明する。「源氏のエキスパートであられる玉上氏の参加によって、前版の修正に止めるという当初の方針が一擲せられ、抜本的改訳が遂行されるに至った」[*6]。現在のように専門領域が細分化していなかったとはいえ、榎や宮地は『源氏物語』の研究者ではない。山田孝雄も、『源氏物語』に関する著作はあるものの、主要な業績は文法論を中心とする国語学の領域にある。玉上の参加は、〈谷崎源氏〉にはじめて『源氏物語』の専

---

*3 玉上琢彌「谷崎源氏をめぐる思い出」(「大谷女子大国文」昭61・3、12、昭63・3)。「谷崎源氏の思い出」(『谷崎潤一郎全集』第二十五巻付録　月報25、昭49・10、中央公論社）と重複する内容は、先行する「谷崎源氏の思い出」から引用した。

*4 榎克朗「「少将滋幹の母」から「新訳源氏物語」へ」(普及版『谷崎潤一郎全集』第二十八巻付録月報28、昭50・1、中央公論社)。

*5 秋澤亙「谷崎源氏と玉上琢彌――國學院大學蔵「『潤一郎新訳　源氏物語』自筆原稿」から――」(「國學院雑誌」平20・10)。

*6 榎「谷崎潤一郎氏と「少将滋幹の母」のことなど」(前掲)。傍点引用者。

門家が加わったことを意味したのである。玉上は京都大学国文学研究室の助手として若手を率い、自身の研究成果を参照させつつ作業に当たった。「若紫まではわたしがした仕事があるので、それを基にすればよく、末摘花からを分担して貰った」[*7]という彼の発言からは、玉上の評釈『源氏物語全釈　評註夕顔若紫』（昭25・４、紫乃故郷舎）が研究室の共通了解となっていた様子がうかがえる。

ただし、源氏研究者である玉上の参加が具体的にどのような意味を持ったかを見定めることは、思いのほか難しい。たとえば玉上の名前は、「新訳序」の中で「旧訳」の「誤訳や脱漏の発見」のための「助手」の一人として榎・宮地とともに言及されるにとどまり、校閲者である山田のように奥付に記載されてはいない。山田没後に刊行された「新々訳」では、校閲者から山田の名前が外れたが、玉上が代わりにその位置につくことはなかった[*8]。〈谷崎源氏〉における玉上の役割には、正式な名称が与えられていないのである。

従来の研究では、谷崎との顔合わせの際に「物語音読論序説――源氏物語の本性（其一）――」（「国語国文」昭25・12）の抜刷を渡し「物語は耳で聞いて楽しむものであった」[*9]と説明を添えたという玉上の回想を踏まえ、彼の音読論が「新訳」の文体に影響を与えた可能性が探られてきた。「新訳」では、「旧訳」で常体であった文体が敬体に改められた。「新訳序」は改訳の方針として「三つの原則」を掲げるが、常体から敬体への文体の変更は、そのうち「実際に口でしやべる言葉に近づける」に相当すると推測される。国学院大学が所蔵する「新訳」の草稿を調査した秋澤亙は、敬体の採用時期を推定し、玉上の音読論が文体の切り換えの「背中を押した」[*10]可能性を指摘する。ただし、玉上が谷崎に敬体を提案した事実はなく、むしろはじめてこの文体を目にしたときには疑念を伝えたという[*11]。後述する玉上自身の現代語訳に敬体が用いられていないこと

---

*7 玉上「谷崎源氏をめぐる思い出」（前掲）。

*8 伊吹和子は、「新々訳」は「今度は校閲者としての山田博士の名を外し、『新訳』成立の際に大変に協力された玉上琢彌先生たち京都大学関係の方々の名も外して、万事を社内だけで処理するように」との社の方針で、下読みも従来の「京大グループ」ではなく秋山虔ら「東大グループ」に依頼したと証言する（「『谷崎源氏』の真実」の真実」（「日本エッセイスト・クラブ　会報」平22・５））。

*9 玉上「谷崎源氏の思い出」（前掲）。

*10 秋澤「谷崎源氏と玉上琢彌」（前掲）。秋澤は注で「京都大学の国文学研究室の学生たちの間では、玉上の音読論が『新訳』の文体に大きな影響を与えたというのは、当初から専らの評判であった」という伊吹の証言を紹介している。榎も「「物語音読論」の玉上の進言かと思った」と言ったという（玉上「谷崎源氏をめぐる思い出」（前掲））。当時の京都大学国文学研究室でこの認識が共有されていた様子がうかがえる。

*11 玉上「谷崎源氏をめぐる思い出」（前掲）。

が示すように、彼の音読論と「新訳」における敬体の採用の間には径庭がある。

本稿では、「新訳」の刊本の一つ、中央公論社七十周年記念事業として限定千部で刊行された、愛蔵本『潤一郎新訳源氏物語』（全五巻、昭30・10、以下愛蔵本と呼ぶ）に着目したい。「新訳」は、初刊、愛蔵本、さらに普及版『潤一郎新訳源氏物語』（全六巻、昭31・５～11）、新書版『潤一郎訳源氏物語』（全八巻、昭34・９～昭35・５）、愛蔵版『潤一郎訳源氏物語』（全五巻別巻一、昭36・10～昭37・３）の計五回刊行され、このうち愛蔵本の段階で改訂が行われている。従来この改訂は見過ごされ、玉上の関与についてももっぱら「旧訳」の改訳、つまり「新訳」の初刊成立までの過程に目が向けられてきた。しかし、玉上自身、愛蔵本を「改訂版」[*12]と呼んで初刊と明確に区別し、改訂にまつわる挿話を印象深く回想している。

それによれば、「旧訳」の改訳の過程で、山田との間で解釈が対立した点が二つあったという。「桐壺」巻の「御前渡り」を誰の動作ととるかという点と、「手習」巻の浮舟についた物の怪を「宇治の八宮の霊であらうか」とする頭注の是非である[*13]。「新訳」初刊ではいずれも山田の解釈が採用されたが、愛蔵本の企画が持ち上がった際、玉上は谷崎に許可を求めた上で山田を説得し、愛蔵本では玉上の解釈に沿うように改められた。また、玉上率いる「京大チーム」の一員として「旧訳」の改訳の作業に加わり、「柏木」巻からは谷崎の口述筆記をつとめた伊吹和子は、中央公論社の編集者として愛蔵本に携わった際、谷崎から玉上と連絡をとって処理するよう指示を受け、「頭注の引き歌についての、玉上先生の新著による訂正」[*14]を行ったと証言する。「玉上先生の新著」とは『源氏物語の引き歌　解釈と鑑賞』（昭30・４、中央公論社）を指す。これはもともと「新訳」初刊の別巻として構想されたもので、谷崎の序文と、玉上を谷崎に紹介した新村出の題簽を掲げる[*15]。頭注の引き歌に関しては、愛蔵本の全篇を通じ

---

*12 玉上「谷崎源氏の思い出」（前掲）。谷崎もこのときの経緯を「熱心な博士は、わざわざそのために当時仙台に住んでおられた山田博士の許を訪ねて意見を闘わされたのを、私は今も忘れない」と振り返っている（「「源氏物語」評釈への期待」（玉上「谷崎源氏をめぐる思い出」（前掲）より））。

*13 頭注に関しては伊吹和子「浮舟入水のことなど」（「むらさき」平６・12）に詳しい。大津直子「山田孝雄と『源氏物語』――國學院大學蔵『潤一郎新訳　源氏物語』草稿における註釈的態度から――」（「国学院大学大学院紀要――文学研究科――」平22・３）は、この頭注の背後に山田の『源氏物語』観を読み取っている。「新訳」愛蔵本では、玉上の意向に沿ってこの頭注は削除されている。

*14 伊吹和子『われよりほかに　谷崎潤一郎　最後の十二年』（平６・２、講談社）。伊吹は「送りがなを統一するなど、「桐壺」から改めて読み直してほしい、自分は…詳しい点検の済んだものに目を通す程度にとどめたい」との谷崎の意向を受け、「本文の誤植の再点検」等の「細かい作業」を行ったという。

*15 新村は京都大学名誉教授。谷崎に相談を受けた新村はまず玉上を紹介したが、身分を誤って「助

て改訂が見られ、証言を裏付ける[*16]。

「新訳」愛蔵本における改訂は、「旧訳」の改訳の延長線上で、玉上の意向を反映する形で行われた。とすれば、〈谷崎源氏〉における玉上の参加の意味は、この「新訳」の改訂の内実を検証することで明らかになるのではないか。本稿では、このような見通しのもと、特に敬語の改訂に注目し、〈谷崎源氏〉と玉上の源氏研究の接点を探ることとする。

2.「新訳」愛蔵本における敬語の改訂

「新訳」愛蔵本の序文には、「特に巻一と巻二とは字句に修正を加へた箇所も少くない」と断られていた。共同研究による調査の結果[*17]、改訂は愛蔵本全五巻のうち巻一（「桐壺」～「花散里」）と巻二（「須磨」～「胡蝶」）にのみ、それも多くは巻一の範囲に集中することが確認された[*18]。なお、愛蔵本の巻一は初刊の巻一・二に、巻二は巻三・四にそれぞれ相当する（以下、初刊の巻数で統一する）。

類例ごとに整理すると、敬語にまつわる改訂が百七十三例と最も多く、全体の約半数にのぼる[*19]。このうち百六十八例が巻一・二の範囲にある。また、〈遊ばす〉〈思し召す〉という特定の敬語を取り除くケースが一定数見られ、改訂が何らかの方針のもとに行われた可能性を想像させる。まずは典型例を挙げ、愛蔵本における敬語の改訂の実態を把握する。

• 元服を<u>遊ばし</u>て→元服を<u>なされ</u>て（「桐壺」29）（初刊→愛蔵本）

教授と言われたため、そんな大物は困る、自由に使える若い人を」と断られたという（玉上「谷崎源氏の思い出」（前掲））。新村出記念財団には、玉上から新村に宛てた題簽の礼状一通（昭29・11・15付）が所蔵されている。

*16 頭注に関しては、他にも人物の敬称の簡略化等の改訂が全篇を通じて確認される。

*17 愛蔵本巻一・二に関しては三嶋潤子との共著による「〈谷崎源氏〉考（一）――『潤一郎新訳源氏物語』愛蔵本における改訂に関する調査報告――」（「京都大学国文学論叢」平23・３）及び「〈谷崎源氏〉考（二）――『潤一郎新訳源氏物語』愛蔵本における改訂に関する調査報告（続）――」（同平23・９）、巻三～五に関しては拙稿「〈谷崎源氏〉考（三）――『潤一郎新訳源氏物語』愛蔵本における改訂に関する調査報告（補）――」（同平23・９）を参照。本稿で改訂箇所を例示する際には、右論文中の改訂一覧表の通し番号を添えた。

*18 愛蔵本巻一・二の改訂の総数は三百八十二例だが、うち巻一に三百四十三例、巻二に三十九例と大きなひらきがある。初刊の頁数を基準に計算すると、平均しておおよそ一頁当たり一例あったのが、十分の一に減る。

*19「〈谷崎源氏〉考（一）」（前掲）では、敬語、音便、文体、語句、表記・ルビ、語意、誤植、その他の八種に分類した。改訂ののべ数は四百十九である（のべ数は分類ごとの改訂数を合計したもの。分類は二種類以上にまたがる場合がある）。なお、表記・ルビの改訂は全篇を通じて特定の単語を中心に確認される。他の改訂とは性格が異なるためこれを除くと、のべ数は三百五十三になり、うち敬語に関する改訂が百七十三と約半数を占める。

• お持ち帰り遊ばした→お持ち帰りになつた（「空蝉」10）

〈遊ばす〉の語を取り除く右のようなケースは五十八例あり、うち五十六例が巻一・二の範囲にある。〈(お) ～遊ばす〉〈(お) ～遊ばされる〉の部分は、大半が〈(お) ～なさ（れ）る〉〈お～になる〉など他の敬語に置き換えられ[*20]、〈なさいます〉のようにそれをさらに敬体に改める例もある[*21]。これを「旧訳」、「新々訳」の該当箇所とあわせて示すと以下のようになる。

• 元服を遊ばして→元服を遊ばして→元服をなされて→元服をなされて（「旧訳」→「新訳」初刊→「新訳」愛蔵本→「新々訳」）
• お持ち帰り遊ばした→お持ち帰り遊ばした→お持ち帰りになつた→お持ち帰りになった

このように改訂箇所に関しては「旧訳」には概ね〈遊ばす〉の語があり、「新々訳」にはない[*22]。

同様に〈思し召す〉の語を取り除くケースも五十例見られ、うち四十九例が巻一・二の範囲にある。〈思し召す〉の部分は〈お思ひなさる〉〈お思ひになる〉に置き換えられる例が大半である。これも「旧訳」、「新々訳」の該当箇所と照合すると、「新訳」初刊は概ね「旧訳」を引き継ぎ、「新々訳」は「新訳」愛蔵本を踏襲することが確認される[*23]。なお、敬語に次いで多いのは音便にまつわる改訂で、これも「新訳」初刊は「旧訳」と、「新々訳」は「新訳」愛蔵本と一致する[*24]。

つまり「新訳」愛蔵本における改訂には、〈遊ばす〉〈思し召す〉という特定の

---

*20 〈(お) ～遊ばす〉が〈(お) ～なされる〉・〈(お) ～なさる〉・〈お～になる〉に置き換えられるケースがそれぞれ二十二例・十三例・八例あり、〈(お) ～遊ばされる〉が〈(お) ～なされる〉に改められるのが九例ある（ただし、「お」には「おん」や「御」を、「なさる」には「なすつて」のような音便化の例を含めた）。該当箇所に敬語がなくなる例も少数ながら確認される。

*21 文中の常体が敬体になるのは十三例で、うち十二例が巻一・二の範囲にある。六例が〈遊ばす〉、二例が〈思し召す〉の語の削除と連動している。典型例は以下の通り。
• お聞き遊ばして→お聞きになりまして（「帚木」19）

*22 「旧訳」で該当箇所が訳出されていないため比較できない三例を除く五十五例のうち、「旧訳」に〈遊ばす〉の語がないのは四例のみ。「新々訳」で該当箇所に〈遊ばす〉の語が用いられることはない。

*23 他に〈思つていらつしやる〉に置き換えられる例や、該当箇所に敬語がなくなる例が少数見られる。「旧訳」に〈思し召す〉の語がないのは六例のみ。「新々訳」で該当箇所に〈思し召す〉が用いられることはない。典型例は以下の通り。
• 思し召す→思し召す→お思ひになる→お思いになる（「帚木」17）

*24 五十九例あり、すべて「旧訳」から「新訳」初刊に受け継がれたウ音便がなくなり、その結果が「新々訳」へと受け継がれている。典型例は以下の通り。
• 早う→早う→早く→早く（「桐壺」1）
• 附き添うて→附き添うて→附き添つて→附き添って（「帚木」4）

敬語の有無に関して、「旧訳」を踏襲する「新訳」初刊の本文を改めるという意図があったと考えられる。敬語にまつわる改訂が最も多く、かつそれが初刊巻一・二の範囲に集中していることは、「旧訳」の改訳の途中で敬語に関して何らかの方針の転換があったことを示唆するだろう。

注意したいのは、改訂が訳文中のすべての〈遊ばす〉〈思し召す〉を対象としていないことである。たとえば以下は、「桐壺」巻の藤壺入内のくだりである。

> いつそ内裏住(うちず)みを遊ばした方がお気晴らしになると云ふ考におなりなされて、遂に宮中へお上げになりました。藤壺のおん方と申し上げます。…何事も存分に遊ばして、不足なことはおありになりませぬ。…お上も、…此の上もなくお慰み遊ばすやうになつて行きますのも、思へばそれが浮世の常と云ふものでせうか。(「新訳」初刊)

このうち「内裏住(うちず)みを遊ばした」と「存分に遊ばして」(傍線部)は、愛蔵本では「内裏住(うちず)みをなされた」「存分になされて」に、それぞれ〈遊ばす〉の語を除くように改められている。一方、「お慰み遊ばす」(二重傍線部)は改訂の対象になっていない。愛蔵本でもそのまま「お慰み遊ばす」である。〈遊ばす〉〈思し召す〉の語は、一様に削除されるのではなく、愛蔵本でもそのまま残る場合があるのである。

愛蔵本で〈遊ばす〉〈思し召す〉の語を取り除く場合、その部分は〈(お)〜なさ(れ)る〉〈お〜になる〉といった他の敬語に置き換えられる例が大半であった。〈(お)〜なさ(れ)る〉〈お〜になる〉は訳文中で多用される敬語である。また、右の「お慰み遊ばす」の動作主は桐壺帝だが、愛蔵本で帝や東宮の動作に用いられる〈遊ばす〉〈思し召す〉が削除される例はない。つまり、改訂には〈遊ばす〉〈思し召す〉の語の使用を特定の場合――たとえば帝など特定の人物を動作主とする場合――に限定するという意図があったと考えられる。以下では〈遊ばす〉に議論を絞り、玉上の敬語に関する発言を参照しつつ、「新訳」の改訂の背景を探る。

3．玉上琢彌の敬語論

玉上琢彌は、昭和二十六年一月二十六日の顔合わせの席で、谷崎が「新訳序」の「三つの原則」に相当する内容を口にしたと回想する。「谷崎源氏の思い出」(『谷崎潤一郎全集』第二十五巻付録　月報25、昭49・10、中央公論社)には「そ

のとき、新訳の序文にある三原則も話に出た」と記され、「谷崎源氏をめぐる思い出」（「大谷女子大国文」昭61・３、12、昭63・３）では「新訳序」を参照しつつ以下のように谷崎の発言が再現されている。

> 『旧訳』で削除したところをおこすこと。この機会に訳文に手を加える。『新訳』の序に、「原文に一方の長所である簡結を捨てて流麗の一面を生かすことに努めた」旧訳の訳しぶりを改める。原文の一文を一文に、。で切れる所は訳文でも 。にする、と言われた。また『旧訳』は敬語が鄭寧すぎる。じじつ「あそばせ」言葉を使う人でも何から何まで「あそばす」でゆけるものではない、と言われた。

「原文の一文を一文に、。で切れる所は訳文でも 。にする」は「新訳序」の三原則のうち「文章の構造をもつと原文に近づけ」るに、「『旧訳』では敬語が鄭寧すぎる」は「旧訳では敬語が余りに多きに過ぎ」たから「今度は敬語の数を適当に加減する」に、それぞれ対応する。ただし玉上によって再現された谷崎の発言は、「新訳序」の文言と対応しつつも微妙に力点が異なっている。たとえば「旧訳」の長い一文を原文に即して簡潔に改めるというとき、右はセンテンスの区切りを、「新訳序」は単文か複文かという文章構造を基準にする。また「旧訳」の過剰な敬語を改めるといい、右は「「あそばせ」言葉」を例にあげるが、これは「新訳序」には見えない。〈遊ばす〉の語は、玉上の再現においてのみ特記されるのである。

玉上は「新訳」初刊の附録「紫花余香」に掲載された「途上にて」でも、〈遊ばす〉の語に論及している。これは副題に「谷崎先生におたづねする」、末尾に「玉上琢彌記」とあるインタビュー仕立ての文章で、玉上が提出した意見書をきっかけにした二人のやりとりを再現するものである。

> ――…それから、やはり敬語に就いてですが、地の文では「何々させたまふ」と、二重に敬語をつけるのは、帝・后・東宮など、ごく特別の方に限つてゐまして、光源氏でも、政権掌握後でないと使はれないのですが、「遊ばす」を此の場合に限ることになさつては如何でせう。
> ――たゞ、どうしても「遊ばす」のつかない言葉がありますね。いま「遊ばせ言葉」を使つてゐる人達でも、使へない時があります。その時は「なさいます」にしなくてはならないが。（傍線原文）

玉上は敬語を「一番厄介な問題」と捉え、幾つかの指摘を行った後、「やはり敬語に就いてですが」と言葉を継ぎ、〈遊ばす〉を地の文における二重敬語の訳語として用いることを提案している。『源氏物語』は地の文で〈させたまふ〉という二重敬語を用いる人物を「帝・后・東宮など、ごく特別の方に限つてゐ」るが、「「遊ばす」を此の場合に限ることに」してはどうか、というのである。

この玉上の提案は、いつ行われたのだろうか。「途上にて」が掲載されたのは、昭和二十七年五月刊行の「新訳」初刊巻四（「薄雲」～「胡蝶」）の附録である。「思い出」と題された後年の回想と違って、これは改訳の作業の最中の「苦心談」[*25]と位置付けられている。「宿から歌舞伎座への車中」でのやりとりを再現したとあり、前年の十月十七日、谷崎の招待で谷崎監修・舟橋聖一脚色・久保田万太郎演出の「源氏物語」を観劇した折のことと推測される[*26]。「新訳」初刊はこの時点で巻二まで刊行されており、改訳の作業は巻三（「須磨」～「松風」）・巻四のあたりを進めていたようである[*27]。谷崎はやりとりの中で「さういふのは忘れずに注意して下さい」と返答しているが、玉上の提案が容れられると仮定して、〈遊ばす〉が地の文における二重敬語の訳語として限定的に用いられる可能性があるのは、はやくて巻三・四以降だということになる。

既に述べたように、「新訳」愛蔵本における改訂は、初刊の巻一から巻四までの範囲にのみ、それも巻一・二に集中して見られる。敬語にまつわる改訂が最も多く、訳文中の〈遊ばす〉〈思し召す〉の語が一部取り除かれている。ここから推測されるのは、以下のような経緯である。玉上は「旧訳」の改訳の作業の途中で、具体的には「新訳」初刊巻一・二刊行後に、谷崎に向かって〈遊ばす〉の語の限定的な使用など敬語に関する幾つかの提言を行った。このときの提案が訳文に反映されるとしたら、巻三・四以降である。「新訳」愛蔵本の主に巻一・二の範囲に見られる敬語の改訂は、玉上の提言を踏まえ、改めて全篇の統一をはかるべく行われたのではないか。

山田孝雄を説得して行われたという愛蔵本における「桐壺」巻の一節の改訂

---

*25「苦心談」は玉上の言葉。編集部による「余録」欄は「先生が翻訳にあたつて、一語々々にいかに深い注意をはらつてをられるかゞおわかりのことゝ思ひます」と説明する。玉上は中央公論社の滝沢博夫を助けて月報の編集に携わっていたという（「谷崎源氏をめぐる思い出」（前掲））。

*26 玉上「谷崎源氏をめぐる思い出」（前掲）。

*27「新訳」初刊巻二の刊行は、奥付によると昭和二十六年九月十日。玉上は、九月三日に書き込み「旧訳」本巻六（「澪標」～「関屋」）及び巻七（「絵合」～「薄雲」）を谷崎に送り、十月三十一日に「澪標」の「新訳」タイプ原稿を送ったという（「谷崎源氏をめぐる思い出」（前掲））。改訂の手順については、秋澤「谷崎源氏と玉上琢彌」（前掲）や「企画展　谷崎潤一郎訳「源氏物語」の世界」（平15・10～11、芦屋市谷崎潤一郎記念館）に詳しい。

も、同じ文脈で捉えられるだろう。

> あまたの御かたがたを過ぎさせたまひつゝ隙なき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふもげにことわりと見えたり。まうのぼりたまふにも、あまりうちしきるをりをりは、…（『源氏物語』「桐壺」）

玉上の回想によれば、「旧訳」の改訳の過程でいったんはこの「御前渡り」を桐壺帝の渡御とする説が採用されたが、帝が女御更衣の住む御殿に行くことはないとする山田の反対にあい、「印刷され刊行されたのを見ると、もとの更衣伺候説に戻ってい」たという[*28]。なるほど「新訳」初刊は、この部分を桐壺更衣の伺候として訳している。

> されば、お上りになります（あが）には、是非とも数多の局（つぼね）々の前をお通りにならねばなりませぬが、それがかうしきりなしでは、朋輩方（ほうばいがた）が忌ま〳〵しうお思ひになるのも、まことに尤もと申さねばなりませぬ。お上りになることがあまりしげ〳〵と度重なる折々には、…（「新訳」初刊）

「新訳」愛蔵本では、「お上（あが）りになります」が「お上がお通ひになります」に、次のセンテンスの「お上りになることが」が「また更衣がお上（あが）りになりますにも、」に改められた（傍線部）[*29]。動作主を指示する単語を補い、帝の動作に〈お通ひになる〉、更衣のそれに〈お上りになる〉と別の単語を用い、さらに接続詞や読点を追加し、帝の渡御と更衣の伺候を区別している。なお、愛蔵本で物語内容の解釈に関わる改訂が行われたのは、この一節のみである。

玉上がこの一節にこだわったのは、これが単にある箇所の解釈の違いにとどまらない問題を含んでいたためだと考えられる。源氏研究者である玉上にとって、彼の源氏研究において、この一節にはそれ以上の意味があったはずである。「新訳」愛蔵本の前後に刊行された玉上の『源氏物語全釈（桐壺帚木）』（昭29・９、白楊社）や『評釈源氏物語』（昭32・１、学生社）を見ると、この箇所に「主語を桐壺更衣とする説もあるが…地の文で「させたまふ」という二重敬語が

[*28] 玉上「谷崎源氏の思い出」（前掲）。

[*29] 他に「忌ま〳〵しう」が「忌ま〳〵しく」に、「あまりしげ〳〵と度重なる折々には」が「あまり度重なる折々には」に改訂されている。

更衣につくことはないので、主語はどうしても帝と見なくてはならない」[*30]という鑑賞を付している。さらに「なお、当時においては、帝が后妃の御殿に渡御されることもあったのである」として『枕草子』や『源氏物語』「絵合」の例を挙げているが、これは玉上が回想する山田への説得の場面と同じ内容である。『評釈源氏物語』には、以下の説明も見える。

> 「源氏物語」の理解に欠くべからざるものの一つ、敬語の用法にまず注意しておこう。…とくに「せ たまはず」と二重に敬語がつくのは帝だけである（地の文ではこの二重敬語は、帝・后・東宮以外ではよほど特別な人にだけついているので、訳するにあたって、「あそばす」はこれだけに使うことにした）（傍線原文、傍点引用者）

ここで玉上は、自身の訳について、〈遊ばす〉の語を地の文における二重敬語の訳語として限定的に用いることにしたと断っている。これは彼が「途上にて」で谷崎に提案した内容と一致する。なるほど玉上の『評釈源氏物語』は、問題の「御前渡り」の箇所を「多くのおん方々のお局を、す通りあそばしての、ひっきりない（主上の）お通り」と、〈させたまふ〉に対応する部分に〈遊ばす〉の語を当てて訳している。彼の議論からすると、この箇所は地の文に二重敬語が用いられているため、「主語はどうしても帝と見なくてはならない」ことになる。敬語、それも地の文における二重敬語だという点で、「桐壺」巻の一節は、源氏研究者である玉上にとって重要な意味を持っていたのである。

玉上が〈谷崎源氏〉に関与したのは、彼が『源氏物語』の敬語に関する論考を立て続けに発表していた時期に当たる。玉上は「源氏物語の敬語法」（『講座解釈と文法　3　源氏物語　枕草子』昭34・11、明治書院）で「今までにわたくしは、源氏物語の敬語について何度か書いている」と振り返り、一連の敬語論は「「源氏物語の敬語――その文学的考察――」と題した研究発表（昭和廿六年十一月二十八日、京大国文学会）を基に書いた「敬語の文学的考察――源氏物語の本性（其二）――」（『国語国文』昭和二十七年二月）が最初であった」[*31]

[*30] 引用は『評釈源氏物語』より。『源氏物語全釈』にも同じ内容が見える。

[*31] 「源氏物語の敬語法」は、「敬語の文学的考察」に続く一連の敬語論を「『時代別作品別解釈文法』（昭和二十七年七月至文堂刊）に、「源氏物語の解釈文法（敬語）」を発表し、続いて「平安時代の敬語」（『解釈と鑑賞』昭和三十一年五月号）を書いた。一方、拙著『源氏物語新釈』（昭和二十九年三月金子書房刊）や『源氏物語全釈桐壺帚木』（昭和二十九年四月白楊社）および『評釈源氏物語』（桐壺帚木空蝉夕顔、昭和三十二年一月学生社刊）においても、敬語の用法について一々の箇

と述べている。「敬語の文学的考察」は、谷崎に抜刷を渡したという「物語音読論序説」とともに「源氏物語の本性」の副題を持つ、玉上の中でも重要な位置にある論考である[*32]。

玉上は、「旧訳」の改訳に際し、当初求められていた「旧訳」の削除箇所や誤訳の指摘だけでなく、敬語に関して幾つかの進言を行っていたようである。国学院大学が所蔵する玉上の書き込みがある「旧訳」本には、「◎一体ニ敬語ガ多スギマス（コノ巻ノ基調ハ　夕顔ノ巻ノ尾ヲ引ク　下ノ品　風ノ　ミスボラシサデス）／頭中将ニハ　地ノ文　敬語ナキガ普通／源氏モ　訳文ホド　丁寧デアリマセン／末摘花君ハ　光源氏ヨリ　更ニ　丁寧デアリマセン」（「末摘花」巻）、「玉葛ニ敬語ガ／多スギマス／源氏トノ間ニ　取扱ヒノ差別ガアルヤウデス」（「蛍」巻）のように、巻の冒頭で、人物ごとの敬語の多寡を指摘する玉上の書き込みが確認される[*33]。玉上は「途上にて」でも、「中の品」の女性が登場する巻に敬語が少ないことを谷崎に伝えているが、これは彼が「源氏物語の敬語法」等で繰り返し論じていたことである。こうした玉上の進言がどの段階でどの程度「新訳」の訳文に取り入れられたかを把握するには、草稿群のさらなる調査が必要だが、彼が「旧訳」の改訳の過程で、自らの敬語論にもとづき、敬語に関して様々な提言を行っていたことは確認できる。

ここまで検討してきたことを整理すると、「新訳」愛蔵本における「桐壺」巻の「御前渡り」の一節の改訂と、初刊の巻一・二の範囲を中心に行われた敬語の改訂、特に〈遊ばす〉の語の削除は、玉上の敬語論を理論的背景にすると考えられる。「旧訳」の改訳の方針は段階的に定まっていったものと思われ、「新

所において解説を試みた」と列挙する（ただし『源氏物語全釈』の刊行は奥付によれば九月である）。玉上はまた、自身の敬語論が「旧訳」を記念して中央公論社から刊行された池田亀鑑編『校異源氏物語』（全五巻、昭17・10）の成果に依拠していることを、「「校異源氏物語」が出て、わたしは「敬語の文学的考察」を発表する勇気をえた」と表現している（「「源氏物語大成」と「谷崎源氏」と」（『源氏物語大成』第六冊付録　月報６、昭60・３、中央公論社））。

[*32] 初出時に「源氏物語の本性」の副題を持つ論文は、この二本。玉上の『源氏物語研究　源氏物語評釈別巻第一』（昭41・３、角川書店）には、「屏風絵と歌と物語と」（「国語国文」昭28・１）、「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御」（「国語国文」昭30・４）が、それぞれ「源氏物語の本性」の三、四として収録されている。

[*33] 「蛍」巻の「取扱ヒノ」は二重線で消去されている。引用した「末摘花」巻と「蛍」巻の他に、「初音」巻の最初の一頁が「平成20年度國學院大學特別推進研究　國學院大學蔵『谷崎潤一郎新訳　源氏物語　草稿』の研究　成果報告書」（大久保一男研究代表、平21・３）でサンプルとして公開されている。「蛍」巻の玉上や山田孝雄の書き込みについては、大津直子・大脇絵里・高塚雅・服部宏昭・増田祐希「國學院大學蔵『潤一郎新訳　源氏物語』草稿の全文テクストデータ化を目指して――附「蛍」巻思試案――」（「國學院大學紀要」平29・１）で調査の成果が一部報告されている。これらの既に公開されている巻や箇所以外でも、人物による敬語の多寡を指摘する玉上の書き込みは散見される。

訳」愛蔵本における敬語の改訂も、この「旧訳」の改訳の延長線上で行われたと推定される。「新訳」愛蔵本は、この意味で源氏研究者である玉上の参加の、一つの達成であった。もっとも、玉上自身の訳とは違って、愛蔵本では「御前渡り」の一節に〈遊ばす〉の語を用いていない。谷崎の訳では、訳文中の〈遊ばす〉の語に原文の特定の種類の敬語との対応関係は認められない。玉上の進言は、原文をどのように訳すかというより、「旧訳」を原型とする訳文をどのように改めるかに寄与したと言うべきであろう。〈谷崎源氏〉において玉上の参加が持った意味は、彼の敬語論を理論的背景にして、「旧訳」の訳文が「新訳」初刊、愛蔵本と改められていったことにある。〈谷崎源氏〉は、「旧訳」を原型とする訳文を改めていく過程で、源氏研究と接点を持ったのである。

おわりに

谷崎は「新訳序」で、「旧訳」以来の校閲者である山田孝雄に加え、新たに榎克朗・宮地裕・玉上琢彌の三者の力を借りたといい、彼らの仕事内容を以下のように説明していた。

> でも、断つて置くが、三氏の仕事は主として誤訳や脱漏や歪曲等がありはしないかを旧訳本について吟味し、私に注意を与へること、及び系図、年立、梗概等を作成することにあつて、翻訳そのものは何処迄も私が単独で行ふのである。

ここで谷崎は玉上らの作業を「旧訳」の「誤訳や脱漏や歪曲等」の指摘に限定し、「翻訳そのもの」は自分一人で行うと宣言している。だが「何処迄も」「単独で」という強調は、かえって作業の線引きの難しさを印象付ける。

興味深いことに、玉上は「全体としては、わたしは「旧訳」のほうが好きである」[*34]というように繰り返し「旧訳」への評価を口にしている。

> 谷崎の「潤一郎訳」「潤一郎新訳」は、前者は谷崎くさく、後者は原文を尊重しているのを特色とする。「潤一郎新訳」は省略なしの完訳である。[*35]
> 「潤一郎新訳」は、原文の一文を訳文の一文にするというほど原文尊重であ

[*34] 玉上「谷崎源氏をめぐる思い出」(前掲)。
[*35] 玉上「源氏物語について」(『源氏物語新釈』昭29・3、金子書房)。

るが、わたくしなどは「旧訳」の方が谷崎らしさもあつていいと思う。[*36]

「谷崎らし」い「旧訳」と、「原文尊重」の「新訳」。谷崎の作品としては「旧訳」をとるというのが玉上の一貫した立場である。玉上は「谷崎さんの方針に従ってお手伝いしたのではあるが、源氏物語のためにと思ってしたのではあるが、功罪いずれか、わからない」[*37]とも述べている。「旧訳」を原型とする訳文の変形の過程で、玉上は谷崎の作品であることと原文に即することとが両立しない点に触れたのだろう。彼の一連の発言には、「旧訳」を原文に即して改めようとした結果、谷崎の作品であることを意図せずして離れることにつながったのではないかという懸念が見て取れる[*38]。

「新訳」愛蔵本の訳文は、新書版・普及版・愛蔵版で使用され、その後の「新々訳」のもとになった。「旧訳」から「新訳」初刊、「新訳」愛蔵本、そして「新々訳」へと、〈谷崎源氏〉は徐々に谷崎の手を離れていった。源氏研究者である玉上の参加によって、〈谷崎源氏〉は、谷崎の訳であることから、『源氏物語』の訳であることへと力点を移した。後から見ると、玉上の〈谷崎源氏〉への参加は、その分岐点となっていたのである。

［付記］

• 訳文は、各刊本の初版を用いた。『源氏物語』の原文は、玉上琢彌『評釈源氏物語』（昭32・１、学生社）を用いた。旧字は適宜新字に改めた。中略は…で、改行は／で示した。その他、断りがない限り記号は引用者。

• 本稿の一部は、静岡大学国語教育学会第二十六回研究発表会での口頭発表「谷崎源氏と玉上琢彌」（平23・10・16、於静岡大学）をもとにしている。発表に際しご教示くださった方々に感謝します。

[*36] 玉上「研究史物語」（玉上編『日本古典鑑賞講座　第四巻　源氏物語』昭32・12、角川書店）。他に「「旧訳」のほうは、文章が谷崎らしくてよろしいんですけれども、あれは、いくら読んでも意味が通らないところが出てまいります。「新訳」のほうは、論理が通るようには、私、一所懸命お手伝いはいたしたつもりであります」（「『源氏物語』を中心に」（小島憲之・玉上・永積安明・井本農一・野間光辰『古典文学の心』昭48・11、朝日新聞社））など。伊吹もこの評価を共有し、「より「谷崎文学」的なのは「旧訳」の文体なのではないか」と述べている（「谷崎潤一郎――「谷崎源氏」の真実」（『めぐり逢った作家たち――谷崎潤一郎・川端康成・井上靖・司馬遼太郎・有吉佐和子・水上勉』平21・４、平凡社）。

[*37] 玉上「谷崎源氏をめぐる思い出」（前掲）。

[*38] 「旧訳」に関しては、拙稿「現代語訳の日本語――谷崎潤一郎と与謝野晶子の『源氏物語』訳――」（井上健編『翻訳文学の視界　近現代日本文化の変容と翻訳』平24・１、思文閣出版）で『文章読本』（昭９・６、中央公論社）の谷崎の問題意識を踏まえ、訳文中の敬語の機能を明らかにした。

• 資料の閲覧に際し、新村出記念財団、国学院大学の秋澤亙氏・大津直子氏にお世話になった。記して感謝します。
• 本研究は、JSPS科研費JS16K16760の助成を受けたものである。